

## 会長挨拶

日本顎口腔機能学会  
会長 山崎 要一

2016年4月から2018年3月まで、本学会の第13代会長を務めさせていただくことになりました鹿児島大学小児歯科学分野の山崎です。2年間よろしくお願いします。

本学会の前身となる「下顎運動機能とEMG研究会」は、日本ME学会（現日本生体医工学会）の専門別研究会の一つとして1982年に創設されました。初代会長の新潟大学 石岡 靖先生のもとに年に4～5回は集う活発な組織として船出し、1985年に顎口腔機能研究会に改名後、1993年6月に現在の日本顎口腔機能学会に昇格し、翌年の第1回学術大会の開催以降、本年4月には第58回大会が徳島大学 松香芳三大会長の下で開催されました。

さて、本学会の特質と目的は、「歯科学の中で、口腔顎顔面領域の動的現象を基礎と臨床の観点から正確に捉えて評価し、形態的改善や訓練を含めた歯科的介入により、健全な咬合の発育と維持を通して、人々の摂食・咀嚼・嚥下や構音などの口腔機能を高め、生涯にわたる歯科的健康の基盤を整えて、豊かな人生を過ごしていただくための支援を行なう」と云うことになるでしょう。

この目標を現実のものとするために、顎口腔機能に関わる研究者は、先ず、現象への鋭い観察眼と、疑問点を抽出する論理的な思考力を身につける必要があります。本学会は、前身の研究会の発足当初から、1演題につき15分の発表と15分の質疑という、他の歯科系学会には類を見ない発表スタイルを継続しております。ひとりの発表者に30分もの時間を費やすため、学術大会での演題数は限られます。しかしこれは、若手研究者にとっては、所属する教室内での検討内容だけに捉われず、広く顎口腔領域の運動計測やその解析と臨床応用において、多様な経験を積んで来られた他の機関の研究者の方々から、研究内容の伸展に欠かせない様々なご指摘や建設的なご示唆をいただけるたいへん良い機会となります。

こうして磨かれた研究成果について、本学会誌に掲載された若手研究者の優秀な論文は奨励賞に向けて審査され、また、学術大会時の優れた発表は優秀賞に選考されます。

さらに、2年毎の顎口腔機能セミナーは、今夏に第10回を迎える予定で、井上 誠先生が新潟での開催準備を進められております。この2泊3日の合宿サマーセミナーにおいて、多くの講師や他大学の受講者と共に過ごす時間は、研究者あるいは臨床家としてご参加いただく皆様の今後のキャリア形成に大きなインパクトを与えることでしょう。

本学会の近況としては、春秋2回の学術大会の開催に加え、昨年10月には福岡市で開催された第23回日本歯科医学会総会の分科会プログラムで、「“機能を測る”ことで始まる臨床イノベーション」をテーマとして、本学会の5名の先生方にご講演いただきました。さらに、2005年に刊行された書籍「よくわかる顎口腔機能 咀嚼・嚥

下・発音を診査・診断する」の改訂作業が藤澤政紀先生の下で進められ、本年2月に刊行されました。今回の構成は若手研究者に多くのトピックスに関する執筆をお願いしており、新しい観点からの顎口腔機能研究の潮流を知る上で、たいへん役立つものと期待しております。

本学会は、学会の規模としては決して大きなものではありませんが、所属する基礎と臨床の分野の垣根を超えた、あるいは歯学と工学の領域を融合した生活者目線のQOL向上という共通の目標に向かって、顎口腔機能研究者としての高い見識と実績をお持ちのベテランの先生方と、今後の歯科界を切り開いて行かれるであろう若手の皆様と、互いに知恵と努力を重ねて切磋琢磨し、真摯に研究を遂行する学術組織として、長い歴史を積み重ねて参りました。

最後になりましたが、昨年4月23日(土)と24日(日)に川越市で開催されました第56回大会におきましては、会長就任直後の大切な学術大会であったにも関わらず、4月14日(木)と4月16日(土)の2回に亘って震度7を記録した熊本地震の救援活動のため、急遽、鹿児島大学に戻り、歯科部門の責任者として対応に邁進しておりました。

学会関係者の皆様に役員会・総会と学術大会をお任せし、震災の支援活動に専念する時間を与えていただき感謝に堪えません。おかげさまで帰鹿の1週間後から20日間に亘り、日本医師会JMATと全国知事会 医療救護班、ならびに九州地区連合歯科医師会協議会の3系統からの要請に応える形で、鹿児島大学病院 災害救援チームの一員として、歯科医師と歯科衛生士が同行する6隊を熊本の被災地に派遣することができました。

第56回学術大会をご担当なさいました藤澤大会長と渡邊準備委員、明海大学の教室員の方々、ならびに前会長の皆木先生、幹事の沖先生、新副会長の山口先生をはじめ、新旧役員の方々には、突然、たいへんなお苦勞をおかけする結果となりました。この場を借りてお詫び申し上げます。

歯科医師として歩み始めたときから関わって参りました本学会への30年余りのご恩に報いるつもりでこの度会長をお引き受け致しました。

昨秋、服部佳功大会長の下で開催されました第57回仙台大会により、研究会時代の43回の大会開催数と合わせて、通算100回の記念すべき学術大会を数える本学会の更なる発展と大いなる飛躍を願って、今後とも皆様のお力添えをよろしくお願い致します。

平成29年4月